白昼幽夢 / Daydream_Revenant

宇宮 祐樹

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

「君の未来を、確かめにいこう」

目次

前編 …… 1
後編 …… 20

前編

■

拝啓、この終わりのない世界へ訪れた、誰でもないあなたへ。

私はイストワール。このゲイムギョウ界の歴史を管理する、司書の役割を持つ者です。

そのきっかけを語ることは、私にはできません。

私の知らない予兆があったのかもしれませんし、彼女がふと願った、それだけのことだったのかもしれません。ただ一つだけ確かなのは、それはすでに起こってしまい、もう先に進むことも、後に戻ることもできないということです。

崩壊と呼ぶには優しすぎるものでした。ですが、終焉と呼ぶにはあまりにも残酷でした。

希望も無く、終わりすらも迎えられなくなった彼らを、私は見届けることしかできませんでした。

それが『歴史を管理する』という、私の役割でしたから。

事の顛末を、ここに記しておきます。

端的に言ってしまえば、ある一日のループでした。

何の変哲もない平凡な一日でした。大きな事件や事故もないありふれた日常。

だからなのでしょう。きっと彼女は、こんな日々を望んでいたんだと思います。

呆れるくらいに退屈で、平和だということすらも忘れてしまいそうな、静かな日常。

それが永遠に続けばいいと、女神でありながら――いえ、女神だからこそ、願ったのでしょう。

ループが始まったのは、その日からでした。次の日もまた次の日も、同じ一日の繰り返し。

人々は同じ日常を繰り返し、永遠に静かな日々を送り続ける。

当然ながら、そのことに気が付いたのは一人もいませんでした。

ただ、私だけはこのループを記録していました。

私は歴史を管理する司書であり、神代に作成された機構（システム）ですから。
ですが、私ができることはそれだけでした。
起きている現象に干渉することなど、私にはできるはずもありません。
プラネテューヌの女神である彼女自身が、こうした結末を望んだ、ということも含めて。
ループが続いているにも関わらず、人々は平和な日々を過ごしていました。
いいえ、元々は彼女らが願ったことなのですから、当然のことかもしれません。
繰り返す毎日を同じように迎え入れ、同じように過ごし、同じように眠りに就く。
永遠に繰り返される、平穏な日常。確かにそれは、完全な平和と言えるのかもしれません。
そういう意味では、彼女は自らの手で、このプラネテューヌに平穏を齎したのです。
でも。
繰り返す日々を同じように生きる人々は、果たして生きていると言えるのでしょうか。
……私には、彼女らが亡霊に見えて仕方がないのです。
永遠に続く平穏という白昼夢に囚われた、亡霊。
この先もずっと、こんな世界が続いていくと思うと、私は。
生きるということは、変わるということです。
どんなに辛く、苦しいことがあっても、その変化を受け入れて人々は生きていくのです。
ですが変化を拒んだその瞬間、人々は生きる意味を失い、ただの亡霊となってしまう。
その成れの果てが、この世界です。
私は役割を失いました。
最早、記録は意味は持ちません。変化を書き留める必要がなくなってしまいましたから。

ある意味でこの世界は、彼女の望み通りに完成したのです。
変わりようのない静かな日々と、そこに彷徨う亡霊のような人々という形をとって。
ここにはもう、何もありません。ですから、どうか早々に立ち去ってください。
あの亡霊のように、永遠を彷徨う屍のようになりたくなければ。
私は、そうしました。
生き続けるために。

■

「……くそ」
切断。視界にノイズが走り、クロワールの意識が現実へと引き戻される。
最初にあったのは後悔だった。短くなった髪を書き上げて、荒く息を吐く。
いつも通り適当に座標を設定したら、まさかこんなところに着地するとは。
この時だけ、クロワールは自らの杜撰（ずさん）な性格を恨んでいた。
「なんだって、こんなところに……」
「クロちゃん？」
吐き捨てたその言葉に反応したのは、ネプテューヌだった。
心配そうな表情を浮かべながら、こちらの顔を覗いてくる。
それが鬱陶しくて、顔を明後日の方へ背けると、彼女は口を尖らせながら続けた。
「どうしたの、なんだか変だよ？」
「何がだよ」
「さっきからぼーっとしてたし。ほんとに大丈夫？」
「別に。どうってことねーよ」
変なところで勘が鋭いのは、こちらもあちらも変わらないらしい。
そんな様に辟易とするクロワールが、もう一度ため息を吐いた。
「それにしても、雨だなんてツイてないね」
「……」

「別に、嫌いってワケじゃないんだけどさ」
ビニール傘の向こうに広がる曇天を眺めながら、ネプテューヌがそんなことを呟く。
さあさあと振り続ける雨は、勢いを弱める気配もなく、ネプテューヌの足元を濡らしていく。
街並みは静けさに包まれていて、雨音だけがビルに反射してぼんやりと響き渡る。
しんみりとした空気感。穏やかな陽気とは違う、艶やかな落ち着いた空気。
ただ、そのどれもが今のクロワールにとっては、ひどく不快なものであった。
「行くぞ」
「え？」
「時間のムダだ。ここにはもう、なんもねーんだからな」
「ちょ、ちょっとクロちゃん！」
急いで立ち上がるネプテューヌが、立ち去り始めようとする彼女の後を追う。
「いくらなんでも早すぎるよ！　もっといろいろ探検しないの？」
「だから、そんなことしてもムダだっての」
「そんな……！　いつものクロちゃんだったら『なんかおもしれ～ことでもね～かな～？』って、勝手にそこらへんウロウロし始めるのに！」
「……ちょっと待て。それ、俺のマネしてんのか？」
「うん、そうだけど？」
「だったらもう少し、似せる努力とかしろよな」
「と、とにかく！」
がし、とネプテューヌが勢いよく、クロワールの羽根を掴む。
「いっ……お前、羽根はやめろって何度も言ってるだろ!?」
「ごめんごめん！　でもやっぱり、ちょっとだけ探検しようよ！」
「だからムダだってわかんねーのかよ！　ほら、さっさと行くぞ！」
どうしてこうもワガママで、自分勝手なのか。

今一度クロワールが疑問に思ったが、その答えはすぐに見つかった。
彼女はどうあがいても、ネプテューヌなのだ。
ならば、仕方のないことだった。
「……ねえ、クロちゃん」
至った回答に頭を抱えていると、ネプテューヌが静かにそう問いかけてくる。
「なんだよ」
「私のこと、置いて行かないの？」
「はぁ？」
苛立ちを含んだ声と共に、クロワールが彼女の方へと向き直る。
浮かべるネプテューヌの表情は、不安に満ちた曖昧なものだった。
「いつもだったら、早くしないと置いてくぞー、なんて言ってくるのにさ。今日は言わないよね。なんだか、なんとしても私をここから追い出そうとしてる感じがするよ？」
「……今はそういう気分じゃねえってだけだよ」
「じゃあ、こっちに来てからしばらくぼーっとしてたのは、なに？」
「お前には関係ねーだろ。ちょっとボケっとしてたくらいでうるせーんだよ」
「だったら、ここにいてもムダだ、っていうのは？」
「それはだな……」
「……どうして、ムダだって分かるの？」
すると彼女は、クロワールの瞳をじっと見つめながら、
「もしかしてクロちゃん、ここに来たことあるんじゃないの？」
沈黙。見つめ合う二人を、雨音が包み込む。
焦りはなかた。後ろめたさも。後悔すらも感じていない。
ただクロワールの中にあったのは、諦めにも似た奇妙な感情だった。
それと、僅かな懐かしい感覚。それは同時に、忌々しさを想起させるもので。
「……だったら、なんなんだよ」

「え？」
「もし俺がここに来たことがあるとして、お前になんの関係があるんだよ」
　クロワールにとって、ネプテューヌという人間は、旅人から一番遠い存在であった。
　いつもそうだ。行く先で起こった事件に自分から突っ込んで、なんとか解決しようとする。
　そこで手に入れた栄光も賞賛など、全て彼女の手に残らないと、知っているはずなのに。
　英雄になろうが、救世主になろうが、再び旅路へ戻れば、また旅人からやり直し。
　旅人とはそういうものだ。結局、旅人は旅人以外の何者にもなれないのだ。
　だから。
「お前は一体、何になろうとしてるんだよ」
　その問いかけに、ネプテューヌは一度だけ顎に手を当てて考えたあと、
「私は、自分に正直になりたいだけだよ」
　何の気もなしに、そう告げた。
「……は？」
「困ってる人がいたら、助けたい。そうすることでみんなが喜んでくれたら、私も嬉しい」
「バカかお前。今までそうしてきて俺たちが得したこと、あったかよ」
「ないよ。でも、そうしてきた人たちは、みんな笑顔で私たちを送り出してくれた」
　話にならない。価値観が違いすぎる。
　クロワールは、ネプテューヌのこういうところが嫌いだった。
　その在り方がまるで、女神を思わせるから。
「……俺が、困ってるように見えたのかよ」
「うん」
　なんの気もなしに頷く彼女へ、クロワールが舌を打つ。

「それにクロちゃん、ちょっと思ってたんじゃないの？」
「なにを」
「私ならきっと、なんとかしてくれる、ってさ」
　自信満々に言い放つネプテューヌに、クロワールは、ただ。
「……そう、か」
「え？」
「思えば俺は、そういう未来を望んでたのかもしれないな」
「く、クロちゃん？」
　あの記録を残したことも。偶然にも、こんなところに辿り着いたことも。
　出会ったことすらも、全ては今この時のためなのかもしれない。
　それこそが運命――あるいは、彼女から自分へ送られた、呪いか。
　ぼんやりとした表情を浮かべながら、彼女はネプテューヌの前にふわりと浮かんで、
「ついて来い」
「……どこに、いくの？」
　不安と共に投げられた問いかけに、クロワールは一言。
「アイツの夢を、終わらせに行くんだよ」

■

　寂れた廃ビルの非常階段を昇りながら、ネプテューヌがつまり、と一つ置いて、
「ここはクロちゃんの故郷だった、ってこと？」
　果たして故郷と呼ぶべき場所なのか、あるいは自分がそう呼びたくないだけなのか。
　浮かんだ曖昧な疑問を呑み込んで、クロワールは頷いた。
「元々は普通の街だったんだ。どこにでもあるような、それこそお前の故郷みたいな」
「……でも、今はそうじゃないんだよね」
「ああ。どいつもこいつも、亡霊みたいになっちまった」
　傘に着いた雫を払いながら、ネプテューヌが階段の外へと目を向ける。

曇天の下に広がる風景は、何の変哲もないプラネテューヌの街並みであった。
決して寂れているわけでもなく、かといってそこまで賑わっているわけでもない。
他の次元と同様の、どこにでもあるような、至って普通の街の一つ。
ただ、ネプテューヌはそんな景色に、奇妙な懐かしさを感じられずにはいられなかった。
行方の知れない郷愁。揺蕩うような感覚が、胸の奥に広がってゆく。
「呑まれるんじゃねえぞ」
クロワールの放ったその一言に、ネプテューヌがはたと我に返る。
「どこまで似ていようが、ここはお前の故郷でもなんでもねーんだからな」
「……うん。分かってるよ」
「どうだかな。もしお前がそれに捕まっても、助けてやらねーぞ？」
「それこそ、どうだか、だよ」
非常階段の手すりに背中を預け、ネプテューヌがくすりと笑う。
「とりあえず、今までの話を纏めると、この世界は一日がループしてるんだよね？」
「正確には時間軸の繰り返しと存在の固定保存の合わせ技だな」
「……っていうと？」
「アイツらが歳を取ることはないし、何かに干渉されもしない」
「んー、ピンと来ないかも。もっと分かりやすく！」
「そうだな……背景みたいなモン、って言えば分かるか？　たとえば俺たちが登場人物だとして、アイツらやこの世界はその背景……つまり、こっちからじゃ手出しできないってワケだよ」
「ふむふむ」
果たして上手く伝わったかは分からないが、彼女はとりあえず首を縦に振ってくれた。
「で、そこまで分かったとして、お前はどうするつもりだ？」
「そうだなあ……とにかく、もっと探検してみようよ」

よっ、とネプテューヌが手すりから身を起こして、階段を昇り始めた。
「だから、無駄だって。さっきも言った通り、ここには何にもねーんだからよ」
「そんなの分かんないよ？　もしかすると、ループしてない人が見つかるかも！」
「……いるわけねーだろ、そんなヤツ」
何百、何千ものループを観測したクロワールにとっては、呆れた戯言にしか聞こえなかった。
ただ同時に、そんな奇跡を誰よりも望んでいたのも、彼女だけであった。
「あきらめちゃ、ダメ、だよっ、クロちゃん！」
なんて、片足ずつでぴょんぴょんと遊びながら、ネプテューヌが階段を上がっていく。
「……諦めてなんかねーよ」
非常階段の外側、柵の向こうで浮かぶクロワールは、小さく呟いた。
「とうちゃーく！」
やがて屋上に辿り着き、ネプテューヌが叫びながら再び傘を開く。
長らく使われていない廃ビルであった。塗装は所々が剥がれ落ち、コンクリートには雨の跡が残っている。うーん、と一通り周囲を見回すと、ネプテューヌはふぅ、と息を吐いてから、ぽつりと。
「なんにもないね」
「だから言ってるだろ」
傘に入ったクロワールが、呟きに答えた。
「駐車場だったのかな」
「確か……そうだな。数年前に売り払われてたところだったはずだ」
「なら丁度いいや。ここ、私たちの拠点にしようよ」
「はあ？」
間の抜けた声を上げる彼女をよそに、ネプテューヌがよっ、とビルの縁へ腰を下ろす。
「拠点って……そもそも俺たちに用意するモンなんてねーだろ？」

「そんなことないよ？　もしはぐれちゃった時とか、ここに集まっておけば合流できるし」
「……お前、そんなこと考えたこと一度もねーだろ」
「それに、さ」
　すると彼女は、後ろに広がる街並みへと振り返って、
「ここからの眺め、私は好きだな」
　淡い紫の瞳には、雨の向こうに佇むプラネタワーが映っていた。
「……あそこに、女神様がいるんだよね」
「お前と同じ名前のヤツがな」
「そっか」
　ぼんやりとその影を望む彼女の横顔は、何も語ってはくれなかった。
「お前は、どう思う？」
「なにが？」
「この次元のことだよ」
　自分でも呆れるほど曖昧な問いかけに、クロワールが心で後悔する。
　そんな彼女に気づくはずもなく、ネプテューヌは少しだけ間を置いてから、語り始めた。
「いつまでも続く平和な日々っていうのは、確かに幸せなことだと私は思うよ」
「……お前も、そう思うのか？」
「うん。私もたまに考えるもん。こうして冒険してるより、普通に生きている方が絶対に楽だって」
「意外だな。お前がそんなこと思ってるなんて」
「かもね。でも、どうしたって私は人間だから。怖いものは怖い」
　でもね、とネプテューヌは、クロワールの方へまっすぐと向き直って、
「怖いからって足踏みをしても、何かが変わるわけじゃないんだ」
「……ああ、そうだな」
「だから、進まなくちゃ。何かを失うことがあっても、誰かと別れるこ

とになっても」
「でも、悲しくならないのか？」
「そりゃ悲しいよ。でもさ、悲しくなって踏みとどまっても、その悲しみがなくなるわけじゃない。次の一歩を踏み出さない限り、永遠にそれは消えないんだと思うな」
　そうして彼女は、鈍色の空を見上げてから、深く息を一つ。
「もしかすると、だから私は旅を続けてるのかもしれないね」
　少しの沈黙。そのあとに、ネプテューヌがくすりと笑みを溢す。
「なんだか恥ずかしいな、クロちゃんとこういう話するの」
「……いいと思うぜ、俺は」
「やっぱり今日のクロちゃん、なんだか変だよ」
「うるせーよ」
「ふふ」
　吹き出した彼女に、クロワールが口を尖らせる。
「けど、安心したぜ。お前もアイツと同じ考えだったら、って思ったからな」
「理解はできるよ。でも、私はそうとは思わないだけ」
「それでいいんだよ。お前は、お前のままで」
「……やっぱり、今日のクロちゃん、なんだかおかしいよ？」
　素直になれなくなったのは、いつからだろう。
　世界の全てが陳腐に見えたのは、どこからだろう。
　それも今なら思い出せるか。或いは、元に戻りつつあるのか。
　もしかすると、この郷愁に呑まれているのは――
「……だれ？」
　聞き覚えのない少女の声が響いたのは、その時だった。
　突如として耳に入る呟きに、ネプテューヌとクロワールが非常階段の方へ振り返る。
　二人の視線の先に立っていたのは、傘を持った十五、六ほどの齢の少女であった。
　瞳の色は翡翠。腰までに伸びる髪は、後頭部で一つに纏められている。

服装は黄色いパーカーで、逆の手には荷物の入ったビニール袋を抱えていた。
「……え？」
流れた静寂は、ネプテューヌの呟きによって崩される。
その瞬間、少女が傘とビニール袋を投げ捨てて、パーカーのポケットへ手を入れた。
次に見えたのは、こちらへ向けられた拳銃の鈍い輝きで。
「動くな！」
「ちょっ、ちょっと!?」
「だから動くな！　それと勝手に喋るなっ！」
「わかった！　わかったから！」
かたかたと細かく震える銃口に、ネプテューヌが慌てて両手を上げる。
ビニール傘が情けなく地面を跳ねて、紫の髪に雫が滴り始めた。
「……あんたら、誰？」
「私はネプテューヌ。こっちはクロちゃん。二人で次元を旅してるんだ」
「ネプ、テューヌ……？」
ぽつりとその名前を口にしたかと思うと、すぐさま彼女は銃を強く握り直す。
「あんたら……もしかして、あのクソ女神の……！」
「違うよ！　私たちはただの旅人！　ちょうどさっきここに来たばっかりなんだって！」
「旅人……？」
疑いの視線は晴れない。だが、濡れた引き金が引かれることもなかった。
硬直。頬を伝う雨を拭うことすらもできない緊張が、ネプテューヌの全身に走る。
やがて沈黙を破ったのは、彼女からだった。
「……この街は、六年前からおかしくなっちゃったんだ」
「六年……そんなにも前なのか？」

「そんなにもって……ちっこいの、なんか知ってるの？」
「知ってるも何も、俺は元々ここの住人だよ。お前だって、見覚えあるんじゃねえのか？」
「……あんたみたいなヤツ、知るもんか」
「少なくとも、俺みたいなヤツは知ってると思ったんだがな」
未だに向けられる鋭い視線に、クロワールは疲れたように息を吐いてから、
「こうやって話す方が、あなたには馴染み深いかもしれませんね？」
普段とはかけ離れた優しい声色に、少女の目が見開かれた。
「なんで、あんたがここに……」
「ああ、よかったです。これで分からなかったら、目も当てられないことになりましたから」
「……どういうことなのさ、一体」
「困惑する気持ちは分かります。私だって今、とても驚いているんですから」
「そんなこと、言われたって……」
「でも、これだけは伝えさせてください」
するとクロワールは、雫を纏うの銃口をものともせず、彼女の前に進んで、
「今まで一人にしてしまい、申し訳ありませんでした」
ゆっくりと、その小さな頭を下げた。
「……は？」
「私は逃げたんです。生きるために。情けない話にはなりますが」
「あんた、何言って……」
「けれどもう、私は逃げません。あなたを二度と、一人にもしません」
そしてクロワールは、少女の瞳をまっすぐと見つめながら、
「だからどうか、俺たちを信じてくれ」
敵意はもう無かった。それよりも、疑問の方が上回っているのだろう。
そんな一連の流れを眺めていたネプテューヌは、少し意地の悪い笑みを浮かべていた。

「なーに、クロちゃんって元々は敬語キャラだったの？」
「うるせーよ」
「えー、いいじゃん！　かわいかったんだし、絶対そっちの方が似合ってるよ！」
「……俺には似合わねーよ」
　こんな変わり果てた姿になってしまったことが、何よりの証拠であった。
「とにかくだ。俺とお前は話が通じる。それだけで信頼に足る理由にはなるはずだ」
「……仲間、って思っていいの？」
「君がそう思ってくれるなら、ね？」
　笑いながら答えるネプテューヌに、少女は拳銃を構えたまま動かない。
　再びの沈黙が流れる。しかしそれは張り詰めたものではなく、何かを探るようなもので。
　そして。
「もういい。手、降ろしなよ」
　言われるがまま、ネプテューヌが両手をすとんと下ろす。
　少女が気の抜けたように座り込んだのは、それと同時だった。
「なんなのさ、あんたたち……」
「さっきも言った通り、旅人だよ！　そして今は、君の仲間！」
「そういうことじゃ……ああ、いいや。なんでもないよ、もう……」
　つまらなさそうな視線を拳銃へ向けたかと思うと、少女がそれを近くへ投げ捨てた。
「撃たなくてよかったよ。人を撃ったことなんてないから」
「私も撃たれることにはまだ慣れてないから、お互い様だね」
「……どういうことさ？」
　答えが返ってくることはなく、傘を拾ったネプテューヌが少女の前へ立つ。
「ささ、君もこっち来て！　一緒にお話しようよ」
「ちょっとあんた、勝手に……！」

「あ、クロちゃん火ってあったっけ？　それとご飯の準備もしないとね！」
「構わねーけどよ、もう少し探検するんじゃなかったのか？」
「それよりも、せっかく増えた仲間と親睦を深める方が大切だよ！」
好感度も稼げるしね！　なんて口走る彼女に、少女が呆れた視線を向けた。
「……食料は、そこに入ってるよ。缶詰ばっかりだけど」
「おお！　じゃあ、今日は私が腕によりをかけちゃうよ！」
自信満々に腕まくりを始めたネプテューヌが、ビニール袋を持ちながらふと問いかける。
「そういえば、聞いてなかったよね」
「……何を？」
「名前だよ！　仲間なんだから、それくらい教えてくれてもいいよね？」
「ああ、そっか」
思い出したように少女は答えたかと思うと、
「私、ピーシェって言うんだ」

■

廃棄された駐車場、その最上階の片隅にて。
炎に照らされる髪を後ろで一つに纏めながら、ネプテューヌが口を開く。
「それで、ピーシェ？」
「なに？」
「どうして君だけ、ループの影響を受けてないの？」
黙って聴いていたクロワールは、しかしながら大方の予想はついていた。
この世界を取り巻く現象の全ては、シェアエネルギーの逆流によって引きこされている。
人々の捧げる信仰を伝うことで、彼女の意思によってこの現象を発現させる仕組みだ。
少々陳腐な例えにはなるが、管から逆流したと言えば分かりやすい

か。
　だから彼女を信仰している限り、このループから逃れることはできない。
　しかし、逆を言えば。
「……私は、アイツのことが嫌いだったから」
「そうか」
　予想通りの返答に、クロワールが首を縦に振る。
　シェアエネルギーが原因であると理解しているのは予想外だったが。
「ずっと一人だった。親に捨てられて、友達もできなくて、拾ってくれる人もいるわけがなくて。ゴミを漁って生きてきた。食べるものが無い日の方が、多かった。人には言えないことも、沢山」
「だから、そんなもの持ってたんだね」
「頼れるのは自分だけだ、って分かったから。自分の身は、自分で守るしかないから」
「……すまなかった」
「今更あんたが謝ったって、何かが変わるわけないじゃん。やめてよ」
　言葉の全てが心を抉る。色を失った彼女の瞳には、炎に照らされる銃が映っていた。
「女神なんて信じられるわけがなかった。信じても、何も変わらなかったから」
「だからループを回避できたのか」
「笑えるよね。アイツを信仰してないお陰で、助かるだなんて」
「でも、今までよく無事だったよね。女神様にも見つからずに」
「見つかったら殺されると思ったから。逃げるしかなかったのさ」
「……そんなこと、するわけねーだろ」
「どうだかね。あんたはそうかもしれないけど、向こうは？」
　肩をすくめて呟くピーシェに、クロワールは何も言い返せなかった。
「まあでも、生きるのには困らなかったよ。食べものを盗んだり、勝手に寝床を使ったりしても、誰も何も言わなかったからさ。そういう意

味では、前より過ごしやすかったって言えるね」
「……けど、このままじゃダメだって思うんでしょ？」
「そだね。でも何より許せないのは、アイツがこの世界を望んだってことさ」
　頷いて、ピーシェが缶コーヒーを傾ける。
「ねえ、クロワール」
「なんだよ」
「今のこの世界は、あの女神が願った幸せな世界だって、さっき説明してくれたよね」
「そうだ。あいつがそう望んだからな」
「なら、もし私が女神を信仰してたら、私は永遠にこの世界でゴミみたいに生きてたってこと？」
「……かも、しれないな」
「あはは、やっぱりそっか」
　乾いた笑い声を上げながら、ピーシェが真っ暗な空を仰いで、
「ふざけるな」
　冷たく吐き捨てると共に、空になった缶を後ろへ投げた。
「私がどうなろうと、アイツは知ったこっちゃないんだ」
「ピーシェ……」
「変わらない日々が幸せだって言うのなら、私はあのまま生きていた方が幸せだったのか？」
　その問いかけに、クロワールは何も答えることができなかった。
　沈黙。炎の弾ける音だけが、三人の間で響き渡る。
「……この世界が元に戻ったとしても、私が普通に生きられるなんて思ってないよ」
「そんなことないよ」
　返ってきた彼女の言葉に、ピーシェが呆れた視線を向ける。
「あんたに何が分かるのさ」
「分からないよ。私は旅人だからね。でも、それはピーシェも同じじゃないの？」
「……何、を」

「どんな未来が私たちに訪れるかなんて、誰にも分からないんだ」
　そうしてネプテューヌは、彼女と同じように夜空を眺めながら、
「確かに、未来ってのは怖いものだと思うよ。先の見えない、真っ暗な道みたいなものだから」
「……私は進みたくないよ。どうせ、その先に光なんてないんだから」
「でも、このままじゃずっと、君の道は暗闇に包まれたままだよ？」
　炎は儚く、しかし確かにピーシェのことを照らしている。
「自分の目で確かめるまで、未来なんて誰にも分からない」
「……自分の望まない未来が訪れることも、あるでしょ」
「でも、ピーシェが望む未来が、その道の先にあるかもしれないよ？」
「それは……」
「雨が降るか、晴れになるかなんて、明日にならないと分からないんだよ」
「……きっと雨だよ。この先もずっと、永遠に」
　応えるピーシェの声は、震えたものだった。
「怖いならさ、一緒に進もうよ」
「え？」
「一人で進むのは私でも怖い。でも、二人なら手を繋いで一緒に歩いて行ける」
「……それだけのことじゃないか」
「かもね。けれど、私はそうしてくれる友達がいたから、旅を続けられた」
　向けられる視線に、クロワールがため息を一つ。
「勝手に手を引いて振り回してるだけだろ、お前は」
「それでも、私と一緒に着いてきてくれたよね？」
「……そうだな」
　小さな呟きに、ネプテューヌがくすりと笑う。
　そんな二人のことを眺めながら、ピーシェが、ふと。
「……ああ、そうだったのか」
「え？」
「私が欲しかったのは、普通の暮らしや輝かしい未来じゃない。そう

やって一緒に歩いてくれる、ずっと隣で手を握ってくれる、仲間だったんだ」
恵まれた豊かな生活でもなく、暗闇の先にある不確かな光でもなく。
未来へと続く道を共に踏み出す、隣に居てくれる存在。
手を握ってくれるだけで、未来への一歩を踏み出す勇気をくれるような、そんな。
「……決まりだね」
「うん」
こくり、と確かに頷いたピーシェに、ネプテューヌは笑いかけて、
「君の未来を、確かめにいこう」
■

後編

■

――ノイズと共に現れたのは、かつての女神だった。
「これが、あなたの望む理想の世界だというのですか？」
「うん」
頷いた彼女の顔は、黒いノイズで塗り潰されている。
それがただのデータの破損なのか、あるいは自らが塞ぎ込んだだけなのか。
答えは、未だに分からなかった。
「もう、疲れちゃったのかもね」
「疲れた？」
「失うことにも、悲しむことにも」
声は震えていて、今にも消え入りそうなほどに掠れたもので。
言葉が裏表のない本心であることを、何よりもはっきりと示していた。
「だからといって、こんな世界が許されるとでも？」
「じゃあ、何かを失っている人はいる。誰か、悲しんでいる人はいるの？」
「それは……」
窓から望むプラネテューヌの街並みは、いつも通り変わらぬまま。
何も変わることなく、永遠にこの雨の一日が繰り返されていく。
変化を拒んだ、退屈で平穏な日々。終焉は訪れず、循環のみが存在する世界。
「これが、みんなが幸せに暮らせる、たった一つの答えなんだよ」
「……ですが、それは未来を放棄しているのと何も変わらないのでは？」
「だったら、過去に縋り続けることって、悪いことなのかな」
はっきりと、彼女の言葉を否定することはできなかった。
眼下に広がるこの世界は、ある意味では一つの幸せを体現したものなのだから。

「……あなたは未来を拒絶している。それでいいのですか？」
「この平和がいつまでも続いてくれるのなら」
静かに語る彼女は、どんな表情を浮かべていただろう。
欠け落ちたデータには、何も残っていなかった。
「……もう、記録は意味を持ちません」
「そうだね」
「ですから私の役目は終わりです」
「うん。今までありがとう。お疲れさま」
別れに悲しみはない。怒りも、呆れも通り越した。
ただ、心の中に会ったのは、こんなものか、という錆びついた理解だけ。
「……私は、あなたのことが好きでした」
「そうなの？」
「はい」
引き留めようなどとは、今更思わない。これで何かが変わるとも、思っていない。
ただ、最後なのだと。機構（システム）であるはずの自分が、直感でそう思ったから。
「あなたは、人々に希望を与える存在だった」
「そうかな」
「そうです。私も、国民の皆さんも、他国の女神たちも。あなたの姿を見て、勇気を貰っていた。あなたは私たちに未来を与えてくれた。先の見えない暗闇の道を、その明るさで照らしてくれた。幾度も訪れる夜に、朝焼けを齎してくれた。あなたは――この世界を照らす、太陽だった」
「……そんなこと」
「きっとあなたは、この世界の主人公であったんだと、思います」
言葉は自らの予想より、遥かに多く紡がれた。
願っていたのだろうか。無謀にも、そんな希望を与える存在に戻ってほしいと。
けれど同時に、それが不可能であること、無駄であることを、誰よ

りも一番理解していた。
　では、何故こんなにも、濁流のように言葉が吐き出されていくのか。
　……ああ、そうか。
　後悔、していたのか。
「もっと、あなたを理解するべきでした」
「充分だよ。そう思ってくれるだけで、私は嬉しかった」
「私は、あなたの傍にいちばん長くいたはずなのに、それができなかった」
「そうだね」
　短く返される答えに、造られたはずの心がじんじんと痛んでいく。
　データベースで構築された思考領域に、どろどろとした感情が湧き上がってくる。
「……私はもう、ここにはいられません」
「そんなことないよ」
「いいえ。あなたを理解することができなかった。あなたの痛みを共有することができなかった。あなたの本当の望みを、叶えられなかった。私は……私は、あなたに望むことしかできなかった。祈ることしかできなかった。希望で在り続けることを、まるで呪いのように願っていた」
　後悔は続く。永遠に振り続ける雨のように、それが止むことはない。
「私は、行きます」
「どこに？」
「分かりません。ここではない……あなたの傍ではない、どこかに」
　それを戒めと呼ぶには、いささか高尚すぎるだろうか。
　ただ、今の自分にはそうすること以外、できないような気がした。
「寂しくなるね」
「……ごめんなさい」
「大丈夫だよ。ここには、みんながいてくれるから」
「でも、そこにあなたを理解してくれる人はいるんですか？」
「今までもいなかったじゃん、そんなの」

ノイズの裏に隠れた彼女の顔を想像することが、怖くてできなかった。
「さようなら」
「うん、さよなら」
会話はそこで途切れる。
彼女の姿も、データの欠片となって崩れ落ちてゆく。
ただ。
遺された後悔が消えることは、決してなかった。
■
記録終了。
わずかなノイズの後に見えたのは、あの時と同じ鈍色の空だった。
■
「おはよ、ピーシェ」
止むことのない雨の下、屋上で佇んでいたピーシェが、ネプテューヌの声に振り返る。
「あんたたち、やっと起きたの？」
「ごめんごめん、クロちゃんが思ったよりぐっすりしてて」
「お前だって、さっきまで寝ぼけてたじゃねーかよ」
「……まあ、いいけどさ」
適当な呟きを返して、ピーシェが再び同じ方向へ望む。
彼女の隣に立ったネプテューヌが見たのは、雨の中に佇むプラネタワーの影だった。
「……まだ、怖い？」
「かもしれない。これで何も変わらなかったら、意味がなかったら、って思うと」
「そっか」
「……でも、ここにいたままじゃ、何も変わらない」
「うん」
「それに、さ。二人が一緒に来てくれるなら、何かが変わる気がするんだ」
なんて答えたピーシェが、ビニール傘の向こうでくすりと笑う。

張り付いた雫で歪んでいたけれど、それが二人の初めて見た、彼女の笑顔だった。
「……水を差すようで悪いけどよ、具体的にはどうするつもりなんだ、お前ら」
「んー……いつも通りにやればいい、って私は考えてるけど」
「つまり、行き当たりばったりってことじゃねーか」
「でも、私達の旅もそんなもんでしょ」
交わされる会話に、ピーシェがため息を一つ。
「奥の手はある」
密かな、しかし強い呟きと共に、彼女が首にかけていた紐を指先に絡ませる。
少なくともそれは、昨日の彼女にはなかったものだった。
「何それ？」
「内緒。偶然見つけた代物だから、うまく動くか分かんない、ってだけ言っとく」
「……そんな隠し事してる時間ねーぞ？」
「かもね。でも、その前に私はアイツと話がしたいんだ」
「話って……今更、何を」
答えの代わりに、雨粒が傘に跳ね返る音だけが響く。
向けられる彼女の静かな視線に、クロワールが肩をすくめた。
「好きにやらせろ、ってことかよ」
「悪いね」
申し訳なさそうに、ピーシェは弱々しい笑みを浮かべるだけだった。
「勝手にしろよ。ただし、マズいことになったら、俺はコイツを連れて逃げるからな」
「ちょっと、逃げるならクロちゃん一人でやってよ！　私は最後までちゃんと付き合うから！」
「……ありがと。クロワール」
「ああ。無理やりにでも連れてくから、安心しな」
「え？」

間の抜けた声を上げるネプテューヌの肩を、ピーシェが軽く叩く。
「あんたは旅人なんだろ？　だったら、旅を続けなきゃ」
「……それって」
「ほら、さっさと行くよ」
心に浮かんだ疑問は、雨音に埋もれて霞んでいってしまう。
ぼんやりと彼女の背中を眺めていたネプテューヌは、やがてその足を踏み出した。
■
「……で、何事もなく到着したわけだけど」
プラネタワーの正面、門の前に立ったネプテューヌの呟きだった。
「当たり前だろ。俺たちと同じで、街の連中も俺たちに干渉できねーんだからよ」
「そうじゃなくてさ、女神様は私たちに気づいてないのかな、って」
「……知らないとは考えにくいな」
「でしょ？　それなのにここまで来れたのって、やっぱり……」
「待ってるなら、それはそれで都合がいいさ」
会話を続ける二人の間を割って、ピーシェが雨粒に濡れた門へと手をかける。
軋んだ鉄の音と共に、すんなりと道が開かれた。
「進むよ」
「うん……」
臆することなく踏み出したピーシェの後を、ネプテューヌとクロワールが続いていく。
踏みしめた水溜まりには、プラネタワーの全貌と、その頂上にある光が反射して映っていた。
そのまま教会の講堂を開き、二人が傘に着いた雫を落とす。
ばさばさとビニールの暴れる音だけが、広大な空間に響き渡った。
「……誰もいないね」
「こうも都合がいいと、怪しくなってくるな」
誰もいない長椅子の間を、三人が進んでいく。
「静かすぎて不気味だよ、私は」

「でも、これがアイツの望んだ世界なんだよ」
「……女神様が望んだ世界、か」
上階へと続く階段を見つけると、ピーシェがそこで立ち止まった。
「で、クロワール？　アイツは一体、どこにいるのさ」
「さあな。けどよ、六年もバカみたいに同じ部屋にいるとは考えにくいぜ？」
「でもアイツ、そういう類のバカじゃなかった？」
「……否定できねーな」
そうやって立ち止まる二人をよそに、ネプテューヌがかたん、と階段を踏み出した。
「ちょっと、ネプテューヌ？」
「多分だけど、女神様がいるのはこのいちばん上じゃないかな」
「……どうしてそう思う？」
「だって、この世界は女神様が望んだ世界なんでしょ？」
「ああ……」
「それならきっと、女神様はずーっと、この世界を眺めていられると思うんだ」
顔を見合わせるピーシェとクロワールを差し置いて、ネプテューヌが階段を昇っていく。
やがて二人も進みはじめ、階段を昇るだけの時間が続いていった。
途中に見える曇り切った窓の前で、ピーシェがふと立ち止まる。
「私だって……この国の景色は嫌いじゃないさ」
表面を指でなぞると、その隙間から雨に包まれたプラネテューヌの街並みが顔を覗かせた。
「……晴れたプラネテューヌの方が、私は好きだったのに」
くぐもった雨音が、ピーシェの呟きをかき消していく。
やがて階段を昇り続けること、しばらく。ついに三人が、屋上へ続く扉へと辿り着く。
額に浮かぶ僅かな汗を拭うと、ネプテューヌはピーシェへと道を開けてから、
「この先に、君の未来が待ってるよ」

「……うん」
そうやって伸ばした自分の腕が、未だ震えていることに気づく。
怖くないといえば、嘘だった。相対するのが女神という存在であること、この先に待つ未来が、もしかすると自らの望むものではないということ。先も見えない不確かさに対する恐怖と不安が、どろどろと足元に纏わりつくような感覚を、ピーシェは覚えていた。
ずっとこうだった。この現象が起きる前もずっと、こんな風に一人で怯えていた。
けれど。
「私はもう、一人じゃないんだ」
解き放った扉から聞こえてきたのは、強い雨音だった。
降りしきる雨をものともせず、ピーシェが一歩ずつ、しっかりと前へ歩いていく。
水の滴り落ちる階段を上がってゆき、その先の街を見渡せる展望へ。
そして。
「おかえり」
言葉と共にこちらを振り向いたのは。
ネプテューヌともパープルハートとも言い難い、歪な姿をした女神だった。

■

「……随分と、無様な恰好になったもんだな」
「君だって、人のこと言えないんじゃない？」
返ってきたその言葉に、クロワールが口を噤む。
抑揚のない笑みを浮かべる彼女の左目には、電源マークを模した構造体が浮かび上がっていた。
「シェアエネルギーが暴走しちゃってさ。自分でも手がつけられなくなっちゃったんだ」
「……六年もこんなことしてたら、当然だろ」
「まあね。でも、この世界を維持できるなら安いもんだよ」
女神化した右腕と、少女のままの左腕を交互に見つめながら、彼女

が息を吐く。
「……私のことは、知ってたのか？」
「そりゃ、ね。女神である私を嫌っていたことも、知ってる」
「だったら、どうして放っておいたのさ」
「放っておいても問題なかったから、ってのもあるけど……」
少し言葉を探すようにしてから、女神は再び口を開いて、
「君は、この世界を受け入れていたんじゃないかな？」
「……は？」
唐突に言い渡された問いかけに、ピーシェが間の抜けた声を返した。
「だって、前の暮らしよりも今の暮らしの方が、君にとっては遥かに幸せなはずだよ？」
「それは……」
「今までの君なんて、いつ死んでもおかしくなかったんだからさ」
否定はできなかった。今、こうして生きていることが、何よりの証拠だったから。
拳を握りしめる。荒んだピーシェの視線に、女神はあれ？　と首を傾げながら、
「もしかして、無理やり元の暮らしに戻してあげたほうが、よかった？」
「ふざ、けるな……！」
「……ふざけるな、だって？」
空気が冷たく感じられたのは、雨に体を打たれすぎたからだろうか。
一瞬にして静寂を齎した彼女の言葉に、ピーシェが息を呑む。
雨に濡れた神の隙間からは、ぼんやりと光る紫の瞳がこちらを覗いていた。
「どうして……」
「……え？」
「どうして、今まで私のところに来なかったのさ」
「それは……」

「君は生きてきたじゃないか。今までとは違って、食料にも眠る場所にも困らなかった。違う？」
「違わない、けど」
「君は私の理解者だって思ってたんだけど、勝手な思い込みだったんだね」
「……でも。私は今、ここに立ってる」
震えながらも、しっかりと言い放ったピーシェの言葉に、女神がゆっくりと首を傾げた。
「……今更、何をしに来たのさ」
「対話を」
短く答えた彼女が、額に張り付いた前髪をかき上げる。
翡翠の双眸はしっかりと、正面に立つ女神のことを映していた。
「私は、お前が嫌いだ」
「……どうして？」
「私を見てくれなかったから。女神なのに、救いの手を差し伸べてくれなかったから」
「それは……うん、謝るよ。ごめんね」
「でも、本当に嫌っていたわけじゃないんだと、思う」
「どういう、こと？」
「私も、この国の景色が好きだから」
街並みを見下ろすピーシェと同じように、女神の瞳もその風景を映し出す。
雨に包まれたプラネテューヌの街並みはいつも通り、何も変わることはない。
ただ、何故だろうか。
いつもだったら気にしない雨音が、こうも煩わしく聞こえるのは。
「私は、お前が信じられなかっただけなんだ」
「信じられなかった？」
「お前を信じても、何も変わらなかったから。信じても無駄だって、分かってたから」
「……耳の痛い話になるね」

「私は……未来を信じられなかった。今日を生きていくだけで、精いっぱいだった」
「そうだね」
「……でも、お前も私と同じじゃないの？」
「同じ？　女神である私と、人である君が？」
「うん。未来を信じられずに、今に縋り続けることしかできない、寂しがりやなんだ」
「そんな、こと……」
「じゃないと、こんな世界なんて望まないよ」
　ピーシェの言葉に、女神は口を閉ざしたまま答えない。
　降りしきる雨音が沈黙を紡ぐ。濡れた前髪が、彼女の瞳を隠していた。
「お前の痛みが分かったわけでもない。寂しさを理解することなんて、きっとできない」
「……そうだね。君は人間で、私は女神だから」
「でも、一緒に進むことはできるんじゃない？」
「一緒に……？」
「そう。それなら寂しくなることもない。そうでしょ？」
「それで、私たちの望む未来は訪れるの？」
「分かんないよ。少なくとも、ただの人間である私には」
「……私にも、分からない。これからの事なんて、誰にも分かるはずがない」
「なら、今よりもずっといい未来があるかもしれないよね？」
「君は一体……何を望んでいるの？」
「雨が上がった後の、青空を」
　鈍色の雲、その向こうを見つめながら、ピーシェはそう答えた。
「……君が生きていけるかどうかも、分からないのに？」
「それでも。今よりずっといい未来になるって、信じられるよ」
　会話はそこで途切れる。視線を交わす二人の間を、雨粒が通り過ぎていく。
　やがて言葉を繋いだのは、彼女からだった。

「……私は」
「うん」
「私は、プラネテューヌの女神。この世界を守護する、最後の一人」
宙に伸ばした女神の右腕には、漆黒に染まる刀が握られる。
それを地面に突き立てると、彼女は紫に輝く瞳をピーシェと向けて。
「人間よ。未来へ進みたくば、その意思を私に示してみろ」
背後に浮かび上がるのは、透明の片翼。頭上には天使を模したような円環。
そして、放たれたシェアエネルギーの覇気が周囲の雨粒を吹き飛ばす。
「ピーシェ！」
「……やっぱり、こうなるのか」
ピーシェが吐き捨てると同時、刀を取った女神が、彼女へと襲い掛かる。
咄嗟に後方へと回避。地面を転がりながら取り出した銃を構えて、引き金へと指をかける。
乾いた音が続き、それと同じ数だけ、彼女の刀から甲高い音が鳴り響く。
刀身から上がる白い煙の向こうからは、それよりも鋭い彼女の視線が向けられていた。
「お前は進みたくないの？」
「……この世界を望んだのは、他でもない私なんだ」
「だから、この世界に残り続けて……進もうとしないってこと？」
「それが最後の女神である、私の役目だから」
言葉を放ち、再び女神が刀を振り下ろす。
それを防いだのは、双剣を重ねるネプテューヌだった。
「ネプテューヌ！」
「っ……この……！」
「……旅人か」
交差する刀身を挟みながら、女神が言葉を紡ぐ。

「私と同じ名前。でも、それ以外は全て違う」
「どういう……こと……？」
「君には失うものが何もない。だから、進み続けることができる。私と違って」
「……そうじゃない、よっ！」
刀を蹴り上げ、そのままネプテューヌが女神の同体を踏みつけて、跳躍。
空中へと舞い上がる彼女へと、体勢を立て直した女神が刀を振るう。
閃光。わずか一瞬の後に訪れた剣戟が、彼女の髪を切り払った。
「私にだって失うものはある……ううん、失ってばっかりだよ」
「何を」
「誰かと出会って、何かを手に入れても、旅に戻ったらそれは全部なくなっちゃうから」
「それで君は、悲しくならないの？」
「なるよ。でも、笑顔で送り出してくれるみんなが、それ以上の嬉しさをくれる」
「……そう」
続くのは言葉ではなく、連続して鳴り響く銃声だった。
咄嗟に刀を構えて、向かってくる鉛玉を女神が弾く。
ただ、そのうちの一つは刀を通り過ぎ、彼女の頬へと直撃した。
血は流れない。ぼろぼろと、まるで砂の城が崩れるように、彼女の頬のかけらが地面へ落ちる。
「お前……」
「しょうがないよ。シェアエネルギーとか全部、維持に使ってるからね」
地面に転がる灰色の欠片を踏み潰して、彼女が答える。
「……そこまで行くと、もう戻れねーぞ」
「いいよ。戻るつもりも、進むつもりもないから」
そうして刀を構えたネプテューヌが、地面を蹴ってピーシェへと向かう。

斬撃。咄嗟にピーシェが横へと跳躍し、拳銃を握り直して胸の前へ。
狙いを定め、引き金に指をかける。
一瞬の間の後に、乾いた銃声が鳴り響く――ことはなく。
「な……!?」
からん、と。
真っ二つになった銃身が、彼女の足元に跳ね落ちた。
「ピーシェ、これ使ってっ！」
その理由を理解するよりも先に、ネプテューヌから投げ渡された剣を掴む。
次の瞬間、直上より振り下ろされた漆黒の刀を、その剣が受け止めた。
「……っ、あのさ！」
「なに？」
「一緒に進めないのか!?　私と、お前で！」
「……よくそんなこと言えるよね。私が嫌いなんじゃなかったの？」
「自分でもそう思うよ！　でも、私もお前も、同じだから！」
「……」
「私と一緒に、この世界の未来を確かめにいこうよ！」
答えはない。代わりに返ってくる剣戟が、彼女の体を吹き飛ばした。
濡れた地面に拳を撃ち付けながら、ピーシェがゆっくりと立ち上がる。
「……それは、できない」
「どうしてだよ！」
「私は、この世界の女神だから」
静かに告げる彼女に、ピーシェは一度歯を食いしばってから、
「この、分からずやッ！」
叫ぶと同時、ピーシェが首からかかる紐へと手をかけ、強引に引き千切る。
そして彼女の手に握られたのは――黄金の光を放つ、菱形の結晶体

で。
「女神メモリー……？」
輝きを目の当たりにしたクロワールが、思わずその名を呟いた。
女神メモリー。
とある次元において、手にした人間を女神へと昇華させる、奇跡にも近い代物であり。
また同時に、手にした人間を醜い怪物へと堕落させる、危険なアイテムであった。
「奥の手ってまさか、アレのこと!?」
「アイツ、博打にも程があるだろ……！」
緊迫する二人をよそに、ピーシェがメモリーを自らの胸元へと掲げる。
「……化け物になるかもしれないけど、いいの？」
「でも、お前と同じ女神になれるかもしれない」
「そんなの、分からないよ」
「ああ。お前にも、私にもね」
黄金の光が示す道は、誰にも分からない。
けれど、今になってピーシェがその一歩を躊躇うことなど、あるはずがなかった。
「なら、私に見せてよ。君の未来ってやつを」
静かな呟きと共に、女神がその刀を構え、ピーシェの眼前へと迫る。
けれど、目は逸らさなかった。握り締めたメモリーが、急速に輝きを増していく。
視界を埋め尽くすのは、黄金の光。太陽の如く煌めくそれは、二人を強く照らしていた。
そして――
「……え？」
轟音と共に全身を襲ったのは、強烈な浮遊感で。
声を漏らしたピーシェが見たのは、遠ざかっていく女神の姿だっ

た。
「ピーシェ!?」
「……残念だったね」
「そんな……!」
　落ちていく彼女を一瞥し、女神が刀をネプテューヌへ向ける。
「まだ、やるつもり？」
「……諦めないよ。だってピーシェと約束したもん」
「君は旅人なんだから、放っておけばいいのに」
「でも、そうしたら絶対に後悔するから」
「……旅人に向いてないよ、君」
　じりじりと詰め寄ってくる彼女に、ネプテューヌが片方だけになった剣を構える。
　後ずさって、ぶつかった手すりの後ろには、プラネテューヌの街並みが広がっていた。
「あの子の未来はここで終わった。それだけのことなんだ」
　言い放った女神の言葉に、震えた声で返したのは。
「……勝手に」
「なに？」
「勝手に決めてんじゃねーぞ、お前！」
　飛び出したクロワールは、一目散に落ちていくピーシェへと向かっていく。
　ネプテューヌが身を乗り出して覗くと、既に彼女は自由落下を続けるピーシェに追い付いていた。
「おいっ！　ピーシェ！」
「……クロワール？」
「お前、なんでそんな簡単に諦めてんだ！　この馬鹿野郎！」
「でもさ……もう、ダメだったじゃんか」
「何がだよ！」
「女神と対話をしても無駄だったし……メモリーも、何も応えてくれなかった」
「それは……」

「結局、私の未来はこんなものだった。そういうこと、でしょ？」
「……けど、それはお前一人の話だろ!?」
叫ぶクロワールに、ピーシェがおぼろげな視線を向ける。
「足りないのはシェアエネルギーだ！　それは俺がサポートする！
だから、もう一度！」
「もう一度……どう、すればいいの？」
「信じればいいんだよ！　そんなに難しいことじゃないだろ、今のお前には！」
「信じるって、今更……何を」
「んなもん、本当は分かってるんだろ!?」
「……そう、か。私……は」
輝きを灯すメモリーを握り、ピーシェが告げた言葉は。
「私は、青空が見たい」

――そして。
「っ!?」
「……なに、これ」
先程のものとは比べ物にならないほどの光に、ネプテューヌと女神が声を漏らす。
鈍色の空へと繋がる、黄金の柱。天上へ伸びるそれは雲を切り裂き、太陽を覗かせた。
降り続いていた雨は上がり、暖かな日差しがプラネテューヌの照らす。
晴れ渡る青空の中、陽光を背に君臨したのは。
「……女神？」
黄金の陽を翼に宿す、その者の名を。
「イエロー、ハート……！」
自らの意思を告げるように、ピーシェ――イエローハートが、口にする。
琥珀に輝く瞳の先には、剣を構えるかつての女神の姿が映ってい

た。
「行くよ！」
高らかに声を上げると同時、イエローハートの翼が空を駆ける。
衝突はすぐだった。漆黒の刀と陽光の刃が激突し、衝撃波を放つ。
「言ったでしょ？」
「……何を？」
「未来はどうなるか誰にも分かんない、って！」
叫ぶと同時、イエローハートの放った蹴りが、女神の体を打ちあげる。
そのまま追走。上空に舞い上がった彼女の拳は、しかし紙一重で避けられる。
刃が女神の頬を掠り、零れ落ちた欠片が宙を舞う。
直後に放った斬撃がそれを両断し、ピーシェへと襲い掛かった。
「うわっ!?」
体を揺るがすほどの衝撃と共に、世界がぐるぐると回転する。
翼の出力を上昇、無理やり体勢を立て直すと、眼前には既に次の一手が迫っていた。
両腕を重ねる。直後に、鈍い金属音が体の全体に響き渡った。
「っ……この……！」
「……人であることを捨ててまで、進もうとするなんて」
「なに、さ！」
「愚かだ。もう、後戻りできないんだよ？」
「かも、しれないね！　でも！」
太陽の輝きに呼応するように、イエローハートの翼が光を放つ。
未来へと続く道を照らす、黄金の光。それはやがて、交錯する彼女の刃へ灯る。
「戻る必要なんて、もうどこにもないんだ！」
「な……！」
「進み続けたその先に、私の望む未来があるはずだから！」
張り上げた声と同時に、イエローハートが両腕を解き放つ。
灼熱。空間を歪ませるほどの熱が、女神の体ごと吹き飛ばした。

瞬時に体勢を立て直す彼女へ、再び光を纏う刃が迫る。
剣戟は鳴り止まず、幾度も交わる刃と刀が、星屑のように青空を彩っていた。
「……すごい」
「急造とはいえ、ここまで張り合えるなんてな」
ぽつりと言葉を漏らしたネプテューヌに、クロワールが答える。
「急造？」
「考えてみろよ。街がこんな状態で、メモリーにシェアエネルギーが残ってるはずねーだろ」
「失敗したのはそれで……じゃあ、ピーシェはどうやって変身してるの？」
「アイツの中にある信仰心を、無理矢理シェアエネルギーに変換させてんだよ」
「……信仰心？　でも、ピーシェは女神を信じてないんじゃ……」
「けどよ、アイツ言ってたじゃねーか」
青空を自由に駆ける彼女を眺めて、クロワールが。
「自分の未来を信じてる、って」
過去に縋り続けるための力と、未来を信じて進むための力。
そのどちらが強いかなど、語るに及ぶはずがなかった。
「ただまあ、まだ博打なことには変わりねーな」
「まだ……って、まさか！」
「何といっても急造だからな。長くは保たねーぞ」
クロワールが告げたその瞬間、三度目の激突が起こる。
放たれた熱波が、ネプテューヌの髪を荒く靡かせた。
「……なるほど。未来への信仰心、か」
向けられた紫の瞳は、どこか懐かしい雰囲気を纏っていて。
「無理やりなことするなあ、いーすん。そんなことする性格じゃなかったのにさ」
「……変わったんだよ。きっと、お前を連れ出すために」
「私を？」
交錯する刃と刀の向こうで、彼女がこくり、と首を縦に振った。

「クロワールは、未来を見せたかったんじゃないかな」
「未来？」
「うん。未来にはこんな可能性もあるんだって、教えたかったんじゃないの？」
「……そのために、三日どころか六年もかかるなんて。時間かけすぎだよ」
くすりと笑ったのも束の間、女神が刀を振り払って、イエローハートを軽く吹き飛ばす。
体勢を立て直すのは容易だった。そしてそれは、対話が始まることを意味していた。
軽く息を一つ。そして、崩れ始めた右腕を眺めながら、女神が口を開く。
「私はもう長くない。このまま戦い続けたら、たぶん朽ちていくんだと思う」
「……降参する？」
「まさか。それに、それは君だって同じじゃないの？」
女神の右腕が示した、その先には。
ぼろぼろと微かながらも、同じように崩壊を始めつつあるイエローハートの左腕があった。
「本来、存在しない筈のエネルギーを使ってるんだ。そうなって当然だよ」
「……でも、私は降参しないよ」
「そっか」
瞼を閉じ、再び開いたそこには、紫の瞳が冷たく光り輝いていて。
「次で、終わらせる。この戦いも、君の未来も」
そうして刀を構えた女神の姿を、太陽のように光を放つ琥珀の瞳が映していた。
「終わらないよ。私はまだ、進み始めたばっかりだから！」
永遠の過去を守り続ける旧き女神と、未来への道を歩み出した新たな女神。
対峙する二人は、それぞれの翼で青空を駆け出した。

そして。
永きに渡る白昼夢が、終わりを告げた。
■
「……あ、れ？」
朧げな視界に映ったのは、心配そうな表情を浮かべるピーシェの姿で。
「大丈夫？」
その声に答えることもせず、首だけを動かして周囲へ視線を巡らせる。
見えたのは、彼女と同じような表情で自らを見つめる、同じ名を冠した少女と。
傍らで呆れた表情を浮かべている、かつての同僚。
そして、そんな彼女らの後ろに広がる、晴れ渡った青空であった。
「……そっか。負けちゃったのか、私」
深く息を吐くと、どうしてか安心したような落ち着きが胸の中に広がった。
不思議と後悔はなかった。あるのは、整然とした理解のみ。
思えばいつかはこうなるのだと、自分でも分かっていたのかもしれない。
「いつもみたく、勝てると思ったんだけどなあ」
「……残念だけど、私の勝ちだ」
「そうだね。完敗だよ」
はは、と軽く笑みをこぼすと、視界の片側だけが不自然に歪む。
それが、顔の右半分が崩れ落ちたことだと気づくのに、時間はかからなかった。
言葉を失う二人の代わりに、クロワールが問いかける。
「ワガママはもう済んだか？」
「そうだね。やり切ったよ」
「……そうか」
吐き捨てた彼女の顔が、どこか悲し気な色に染まっているのは、気

のせいだろうか。
片側だけになった女神の視界では、そんなことすらも分からなかった。
「謝りもしねーし、嘲笑いもしねー。別れの言葉は、六年前に言ったからな」
「冷たくなったなあ、いーすんも」
「……ただ」
「ただ？」
「もう後悔はしねーし、させねーよ」
「……そっか」
その言葉が向けられたのは自分でないことくらい、理解できた。
けれど、どうしてだろうか。それが、自分のことのように、嬉しく思えた。
「ピーシェ」
「なに？」
「君の意思、確かに見せてもらったよ。この国の未来は、君の手に託された」
告げられた言葉に、ピーシェが自らの右手へ視線を落とす。
すると彼女は、ゆっくりとその手を女神へと差し出した。
「……なんの、つもり？」
「未来は私の手に託された、って言うんでしょ？」
片目を見開いたままの彼女に、ピーシェは微笑みを携えながら、
「一緒に進もうって、言ったじゃん」
「……あはは。そういえば、そうだったね」
「だから、ほら。一緒に……」
「ごめんね。でも、それはできないんだ」
力なく震える腕が、差し出された手のひらへと伸びる。
そうして指先が触れた瞬間、彼女の右腕が胴体から離れて、ぼろぼろに崩れ落ちた。
「残念だけど、私は行けない。だって、私はこの世界の女神だから」
運命と言えばそうなのだろう。末路と言えば、そうなのかもしれな

い。
ただ確かなことは、ある一つの時代が終わりを告げ、また新たな時代が始まるということ。
そこにかつての女神の姿など、あってはならない。
どれだけ足掻こうとも、世界がそれを許さないのだ。
「ねえ、いーすん」
「……何だよ」
「この子の引継ぎ、お願いしてもいいかな？」
「ああ」
「三日かかっても、いいからさ。立派な女神にしてあげてよ」
「分かってる。それが、俺の役目だからな」
「……ごめんね。最後になっても、迷惑かけちゃって」
「慣れてるよ」
淡々と答えるクロワールに、女神が微笑みを浮かべる。
それはかつて、彼女が浮かべていた、無邪気なものだった。
「旅人さん。いーすんのこと、これからもよろしくね」
「……分かったよ」
「それと、さ」
「うん」
「君の出来る限りでいいから、いーすんのそばにいてあげてね」
女神の瞳は、首を傾げる旅人を映す。
それはここではないどこか、ずっと遠くを見つめていて。
「私には、それができなかったから」
崩壊が止まることはなく、風に靡く髪すらも塵と化していく。
時代の終わりが迫るその中で、最後の言葉を紡ぐために、女神が口を開いた。
「君たちと出会えてよかった」
「私も。話が出来て、嬉しかったよ」
「……さよなら、だね」
「うん」
そして、最後に残されたぼろぼろにひび割れた瞳には。

突き抜けるような青空と、太陽の輝きに照らされる、プラネテューヌの景色が映っていて。
「ああ、そうか……この国は、こんなにも綺麗だったんだね……」
一陣の風が吹き抜けたかと思うと、それらは全て塵となって、消えた。

■

夕刻。眩い西日が差し込む、プラネタワーの頂上にて。
「俺ができるのは、ここまでだな」
クロワールが告げたのは、あれから三日が経ってからのことだった。
「近々、教会の方から話があるはずだ。それが終われば、お前はこの国の女神になる」
「思ったよりも早かったね」
「……アイツ、引継ぎがしやすいように色々調整してたんだよ。腹立つぜ」
小さな腕に顎を乗せながら、クロワールが口を尖らせる。
そんな彼女の代わりに、ネプテューヌが言葉を続けた。
「まだ実感、湧かない？」
「正直。でも、やらなくちゃいけない、って思ってる」
「上手くいくといいね」
「うん」
こくり、と小さく頷くと、改めてピーシェが二人の方へと向き直る。
「ありがとね。ネプテューヌ、クロワール」
「……いきなり何だよ」
「君たちがいなかったら、私はこの未来に辿り着けなかった」
「ピーシェがここまで来れたのは、自分の未来を信じられたからだよ。私たちは手を握っただけ」
「でも、二人がそうしてくれたから、私は進むことができたんだ」
自らの右手を見つめながら、ピーシェが答える。
その中には、黄金に輝く結晶体があった。
「……さよなら、だね」

「ああ」
「また会えるかな？」
「さあな。明日また来るかもしれないし、お前が女神を辞める直前になるかもしれないな」
「……でも、来てくれるんだ？」
「覚えてたらな」
　意地っ張りな彼女の性格にも、もう慣れたころだった。
「もー、クロちゃんったら素直じゃないんだから」
「なんだと？」
「だって、ここはクロちゃんの故郷なんでしょ？　なら、忘れるはずないもん！」
「……あー、もう！　お前はほんっと、いらねーことばっかり！」
　声を荒げるクロワールが、そのままの勢いで座標を記す。
　二人の真後ろに、ぼんやりと光る穴が開いたのは、すぐだった。
「行くぞ！」
「あっ、ちょっとクロちゃん！」
　強引に手を引かれながらも、ネプテューヌが後ろを振り返って。
「……やっぱり、未来は誰にも分からないんだ。もう、会えなくなるかもしれない」
「そうだね」
「でも、私はいつか、その時が来るって信じてるから！」
「……うん！　私もだよ！」
　未来は誰にも分からない。人はおろか、女神ですらも。
　だからこそ旅人である彼女は、その未来を信じて進むことができるのだろう。
　続く道は未だ暗く、不安と恐怖が入り乱れている。
　ただ、その先には小さく輝く、太陽のような光があった。
「さよなら、ピーシェ」
　別れを告げる彼女へ、ピーシェは笑顔を浮かべながら、
「さよなら、ネプテューヌ！　また、いつかの未来で！」

■ 「白昼幽夢 ／ Daydream｜Revenant」 結 ■